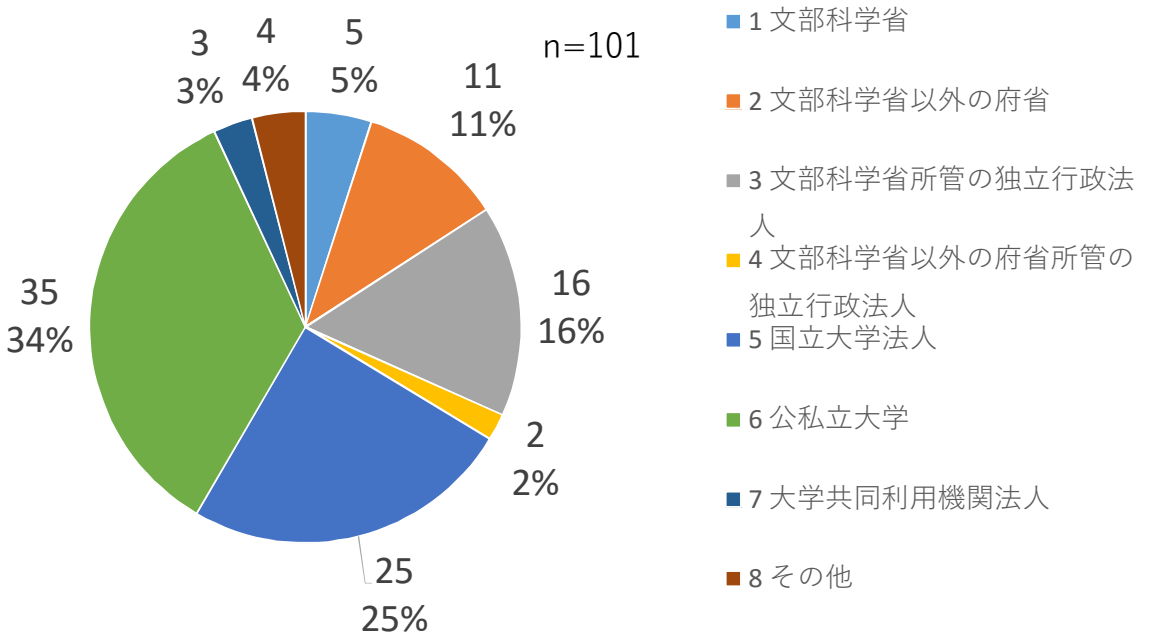
平成29年度　文部科学省研究開発評価シンポジウム
アンケート集計結果

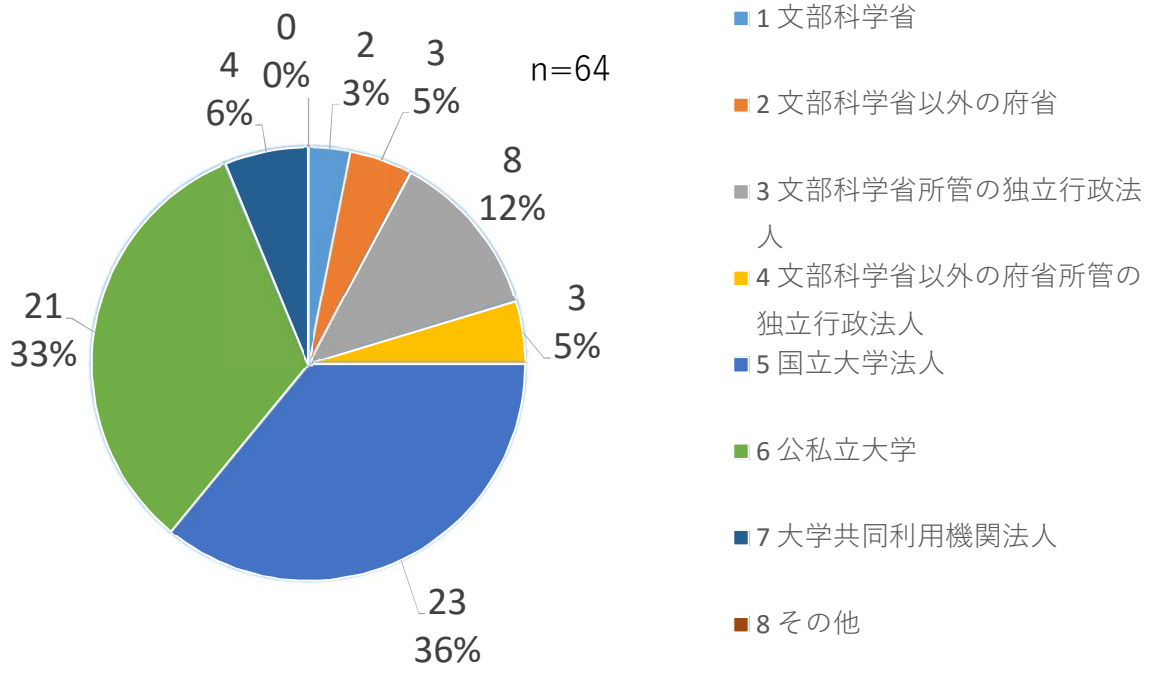
平成29年度の参加申し込み者は118名、実際の参加者は101名であり、参加率は85.6%であった。

参加者所属（アンケート不回答者も含む）

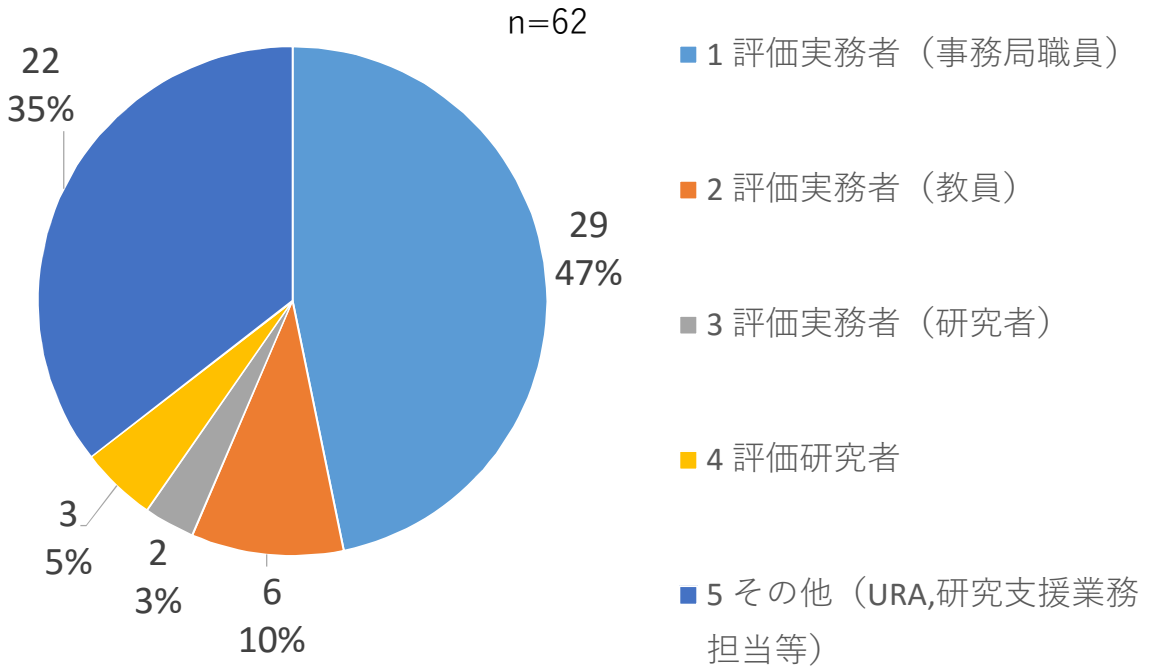


以下はアンケート回答に基づくものである。実際の参加者数は101名であり、アンケート提出数は64であった。アンケートの回収率は63.4%である。

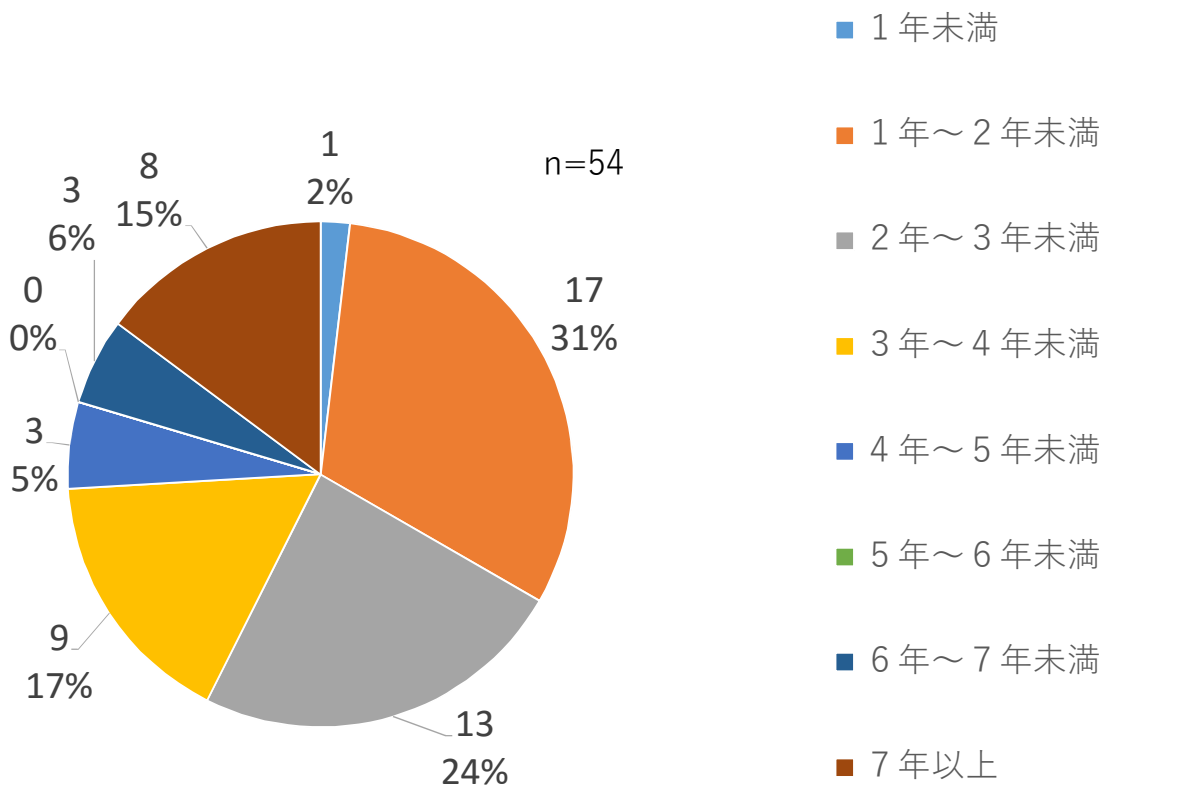
質問１－①（アンケート回答者所属）



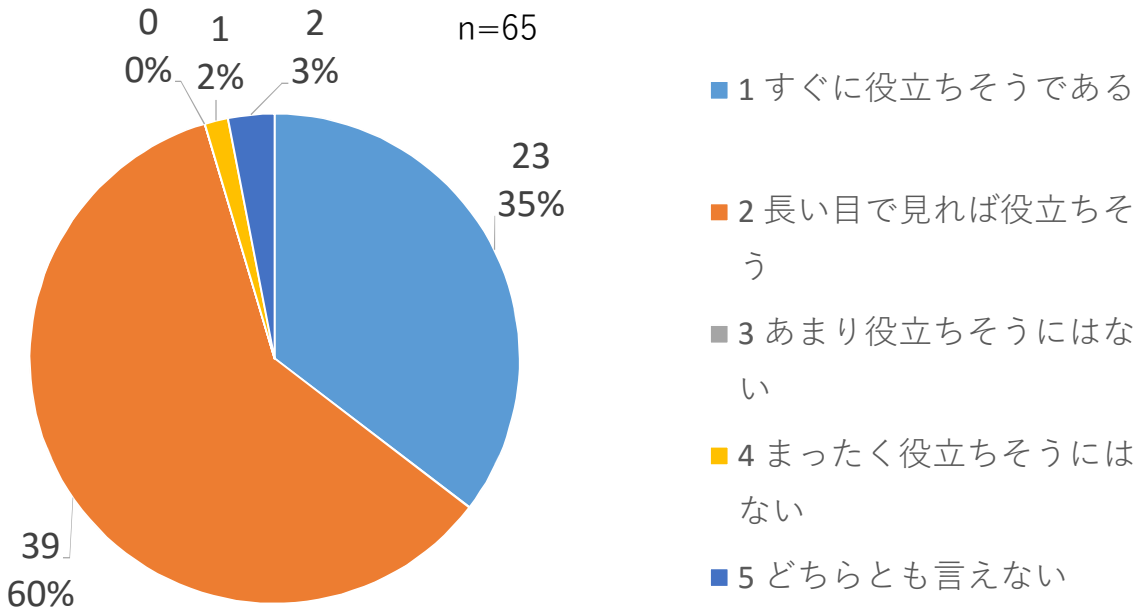
質問１－②（アンケート回答者 業務内容）



質問１－③（アンケート回答者 現在の業務歴）



質問２　シンポジウムの内容は、あなたが仕事を進める上で参考になりそうですか。

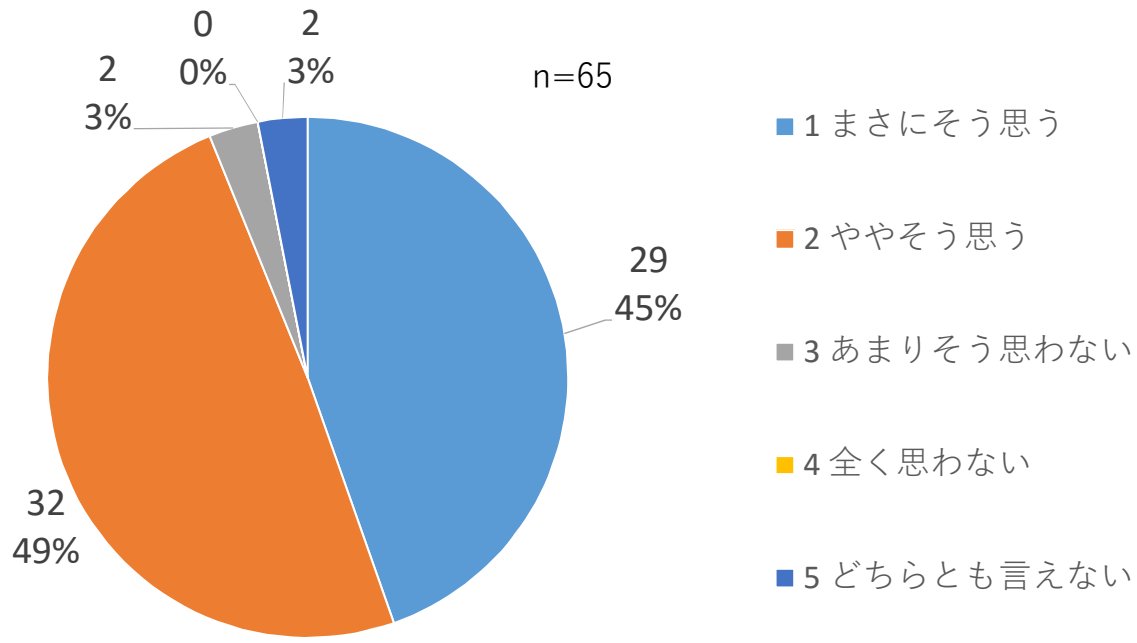


＜すぐに役立ちそうである＞

・evaluationではなく、assesmentとしての評価の使い方の具体例をきかせてもらったから。
・若手の評価基準など具体的に例示があったため。
・若手研究者の育成・支援する新しい取組を自分の組織・分野に合ったものとして作る必要性を強く感じた。
・各大学・組織の取組が具体的にわかった。
・京大・広大の事例は参考になった。
・さきがけの応募支援を検討中でしたので、笹月氏のご講演は大変参考になりました。
・若手の研究者の交流会など行いたいことがたくさん見つかった。
・具体的なやり方の事例を説明いただけたから。
・広島大学の発表内容が特に参考になりました。ＫＰＩの話。
・本学でも若手研究者の育成は課題となっているところであり、企画立案の参考となると思われたため。

＜長い目でみれば役に立ちそう＞
・各組織の取組とならいと手段はそのまま導入することは難しいが、自組織の文化に合わせることを考えなければならないから。
・他機関の取組は非常に参考になった。自機関でも取り入れられるものがないか検討したい。
・シンポジウムとして共通の視点を設定されていたので、全体としてある程度焦点が定まった発表を開くことができた。他方、もっと突っ込んだ内容を聞けるように次回以降もっと視点を広げることがあってもいいのではないか。
・所属大学においては、本格的な評価を実施しておらず、将来的に導入する際の参考となりそうである。
・各大学の具体的な取組を聞けたので、目的と方法のイメージがわいた。
・主に自己評価を行っているため。
・応用場面を部局内の誰かが拾えそうである。
・JSTの立場から共創を推進する場の設計を考えています。若手研究者の評価としての接点を持つ可能性が感じられたため。
・仕組みの構築に時間を要するが、参考となる事例が多くあった。

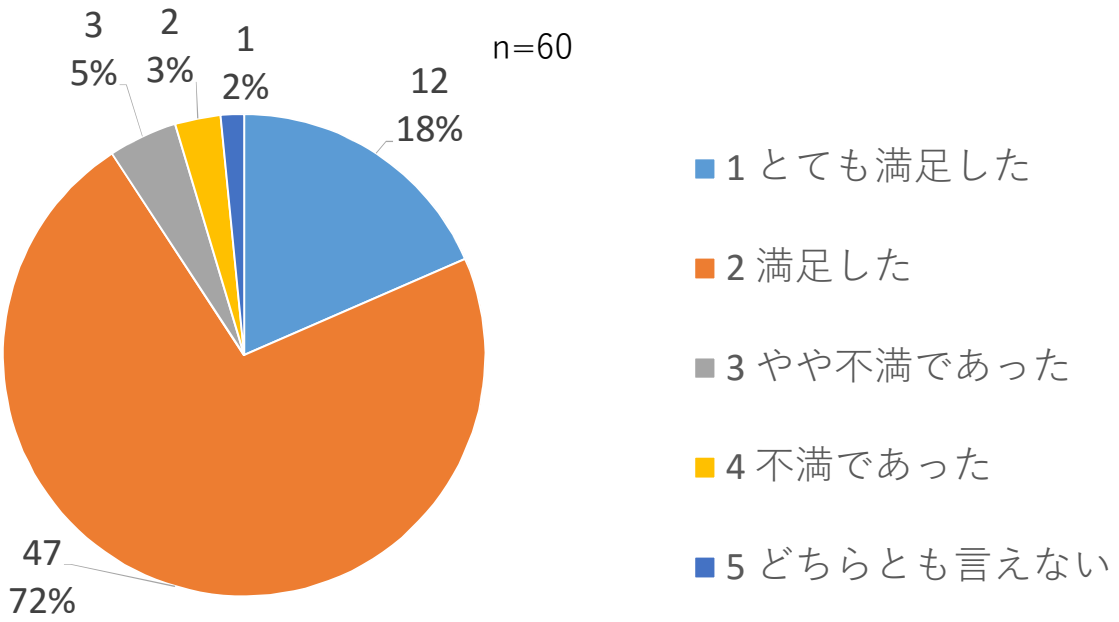
質問３　新たな知見が得られましたか。



＜まさにそう思う＞
・広島大学の取組は参考になりました。
・k-connex、HIRAKUなど、知りたいと思っていた制度取組の具体的な内容が知れたから。
・ある程度整理された知見を得ることができた。
・広大の評価について、話は聞いたことがありましたが、直にお話を聞けて理解が深まりました。
・京大・広大の事例は参考になった。

＜ややそう思う＞
・具体的な評価方法、その他の施策について知ることができた。
・他大学の取組を参考にできた。
・広島大学の取組がすばらしい。
・京都大学様の発表が特に参考となりました。

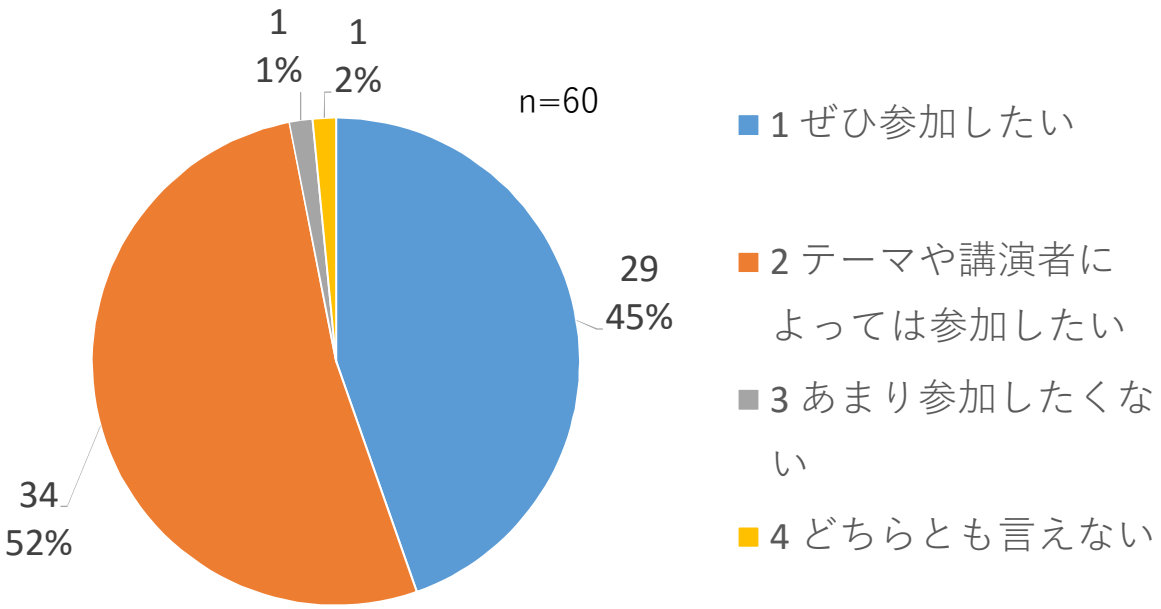
質問４　満足度はいかがでしたか。



＜とても満足した＞
・新たな取組を実施すべきことに気づかされた。
・京大の事例も含め、大変参考になりました。

＜満足した＞
・JSTで単なる研究費配分以外の取組は知らなかった。
・具体的な評価方法、その他の施策について知ることができた。
・大学の取組の時間がもう少しとれると更に良かったと思います。
・興味深い内容であったため。

質問５　今後もシンポジウムに参加しようと思いますか。



＜ぜひ参加したい＞

・成功事例を伺うことで新たなアイデア創出の刺激になる。
・大変参考になる話が多かったので、また参加したいです。
・京大・広大の他にも事例が知りたい（例：阪大適塾）
・URA及びIRに関係する内容・テーマ

＜テーマや講演者によっては参加したい＞

・上記のとおり、所属大学の喫緊の課題ではないため。
・研究支援者について評価の観点から。
・自力で活用できそうな内容であれば。

質問６　希望するシンポジウムの内容やテーマがありましたら、具体的にお書きください。

・文系大学における研究開発やURA活用。
・文系総合大学（中規模）における研究推進のあり方（実例と課題）。
・JSTの若手研究者を育成・支援する取組は、更に詳しく知りたいと思いました。
・若手に限定しない、アセスメント評価について。
・他大学における具体的な評価手法、若手支援の方策について。
・評価方法全体のPDCAについて。
・若手に対する倫理教育が必要であると感じています。メンターがどの様にして倫理を育てていくのか、テーマとして関心があります。
・広島大学さんの数年後をききたい。
・研究開発という観点から、理工分野が主だと思っていましたが、広大の発表は参考になりました。

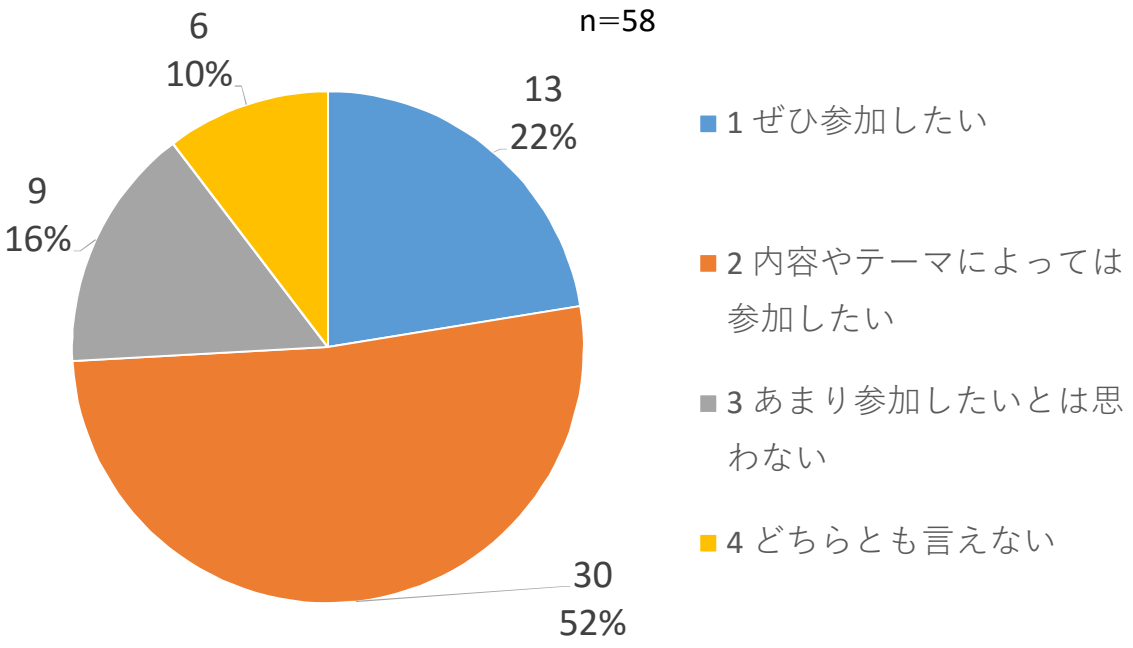
質問７　会場、実施時期、実施時間等について、ご意見・ご要望等がありましたら、具体的にお書きください。

・年度末は何かと忙しいので、時期を再考してほしい。
・実施時期は年度末は避けてもらいたい。
・前方は空席が多いのに、後方は狭い、スライドが小さくて見ずらい。
・席を広く確保してほしい。
・適切な時間配分だったと思います。
・一般参加者の席の配置（後半分）はおかしい。
・プレゼン用のスクリーンが見えにくかった。
・年度末は控えてほしい、夏秋頃希望。
・会場からの質疑応答時間をもう少し取ってほしいと思った。
・適当な場・時期でした。

質問８　その他、研究開発評価シンポジウム全般に関するご意見・ご要望等がありましたら、具体的にお書きください。

・金銭的な支援の場合、どのような研究分野を支援するのか、選定方法をもっと知りたいと思った。
・パネルディスカッションがあまり実用的でなく不要だと思った。
・2日でシンポジウムと参加者のミーティング・ＷＳを行ってもよいのではないか。
・ＭＥＸＴ関連職員も輪に加わって議論意見交換を行う方法を入れてほしい。その中から、新しい政策に発展して欲しい。
・どういう人が参加されているかも最初にふれてほしい。
・とても有意義な時間を過ごせました。
・評価という表現をいくつも使いわけていますが、そろそろ整理する時かと感じました。
・来年も続けてほしい。
・事例発表他で小規模な大学での例があればよいと思う。

質問９　研究開発評価の実務経験者向けに事例発表や自由討議を行う「研究開発評価実務者の資質能力向上のための相互研修」を事務局で検討しておりますが、参加しようと思いますか。



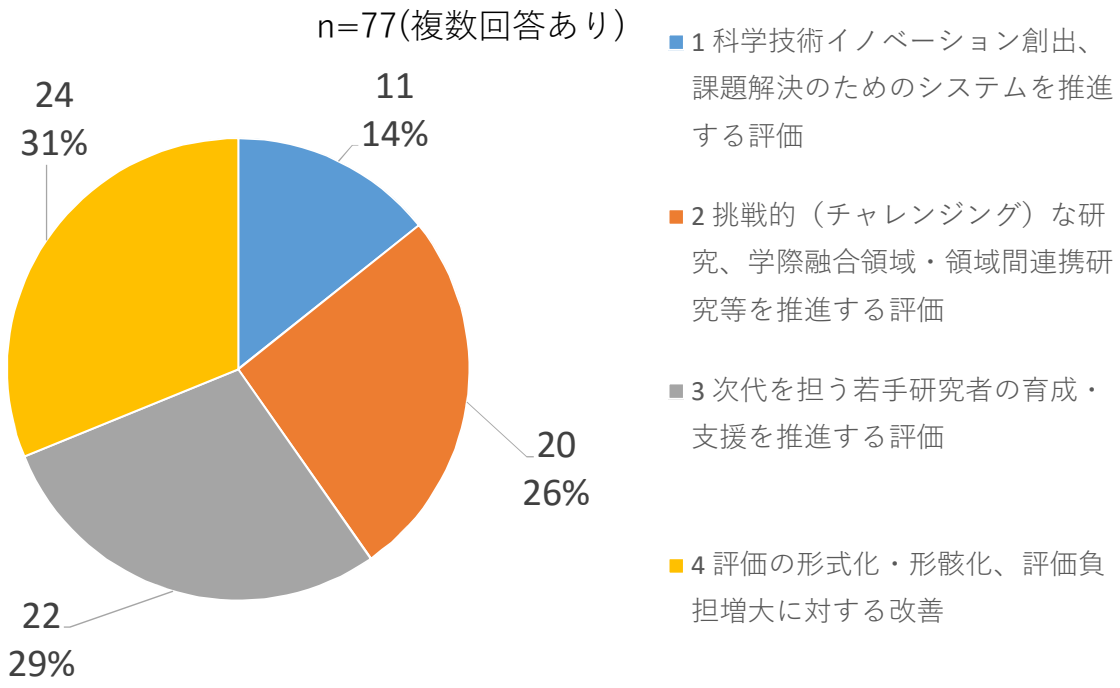
＜ぜひ参加したい＞
・他省庁からも参加可としてほしい。
・評価に対する考え方、方法、問題意識等を関わりある者の間で共有することがとても大切だから。

＜内容やテーマによっては参加したい＞
・事例発表を行えるほどの事例を持っていないため。

＜あまり参加したいとは思わない＞
・実務者の定義がよくわからないため。
・現在の業務としては外れる、参加希望者を募るなど可能か。
・評価実務に携わっていないので。

＜どちらとも言えない＞
・直接の実践者ではないため。
・実務者ではないため。

質問１０　質問９で希望する内容やテーマはありますか。



＜①科学技術イノベーション創出、課題解決のためのシステムを推進する評価＞
・大学の研究組織の柔軟な運営が求められている、どうしたら良いのかを考えたい。
・第６期科学技術基本計画策定の議論の中でしっかり位置付けてほしい

＜③次代を担う若手研究者の育成・支援の推進する評価＞
・「若手研究者」の考え方については「年齢」を重視すべきでph.D取得に関係なくてよいと思う。この辺の議論をきちんと整理してほしい。

＜④評価の形式化・形骸化、評価負担増大に対する改善＞
・研究＝イノベーション創出ではない分野もある、イノベーション一色の評価に危機感ももっている。

質問11　その他、研究開発評価シンポジウム全般に関するご意見・ご要望がありましたら、具体的にお書きください。

・関西圏の開催をご検討願います。
・「研究開発評価」という仕組みは現場にはなじまない印象、大学や政策にいかにエッセンスを取り入れさせるか、今後の評価の課題ではないか。
・研修に参加したいがなかなか時間が合わず資料を公開いただき、ありがとうございます。
・今後も抽象論ではなく、具体論を聞きたい。
・この様な研修会（シンポジウム）をたくさん作っていただきたいと思います。
・地方でもやってください。
・先進的な取り組みを行っている大学の事例があればお聞きしたい。

＜その他の意見＞
・若手研究者の概念的「科研費」ではPh.D.取得者からスタートとなり年齢ではなくなった。
・「農学」の中でも「農業経済」「工学」「生物学」まぜこぜなわけで、一気にまぜることも必要なのでは。耐性は共通教育の仕事になるのかなと。
・「科研費」でPh.D.取得後の者を「若手研究者」と整理しているが「39歳以下」は示さない方がよい。